

発話者・解読者・脈絡

小川 洋通

0. はじめに

ことばは、われわれの思考や感情を表現するものである。このばあい、ことばを伝えあう発話者ないし話し手 (*utterer or speaker*) と解読者ないし聞き手 (*interpreter or hearer*)、ことばがやりとりされる脈絡 (*context*) という二つの側面から、ことばについて考えてみることにする。

1. 発話者のもつ多くの声 (*voices*)

発話者という観点から、次のような、学生の Betty と事務員の John との間のやりとりについて、考えてみよう。

(1) Betty : Can I go ?¹⁾

John : You sure can!

ここで注意すべきことは、John が、その内容に関して責任をもつものではないことである。つまり、彼は、その情報の決定者ないしは源 (*source*) ではないということである。

このばあい、たとえば(1)に先行する会話として、以前に、(2)のようなやりとりがあったと考えられる。

(2) Betty : Do you know yet whether I can go?

John : I'll check with Ann. Can you come back tomorrow?

それによって、John が、上司の Ann に、(3)のようにたずねる。

(3) John : Can Betty go?

Ann : She sure can!

このように、(3)における John の質問は、その源が、John 自身にあるのではなく、Betty そのひとにある。また Ann の応答は、(1)の John の応答の源であることがわかる。

しかしながら、Ann は、その情報の究極的な源ではない。たとえば、その情報は、さらに、その上部の部局によって、最終的になされた決定によるものであると考えられる。

このように情報は、究極的な起点 (*source*) から、着点 (*goal*) に向かって、つぎつぎと伝

えられてゆくのである。これは、また発話には、多くの声がかかわっているということを示すものである。²⁾

ところで、さきの⁽¹⁾のようなやりとりではなく、次のようなやりとりがあったとしよう。

(4) Betty : Can I go?

John : I'm really sorry. Your application was not accepted.

Betty : So, I'm not good enough.

このばあい、たとえば、前日次のようなやりとりが、事務員の John と上司の Ann との間にあったと考えられる。

(5) John : Can Betty go?

Ann : She's been turned down.

John : Why? She's one of our top students this year.

Ann : It's just crazy. Another application that wasn't good enough, I guess.

これをふまえて、学生の Betty と事務員 John との間に、次のようなやりとりがあったものと思われる。

(6) Betty : Can I go?

John : I'm really sorry. You've been turned down.

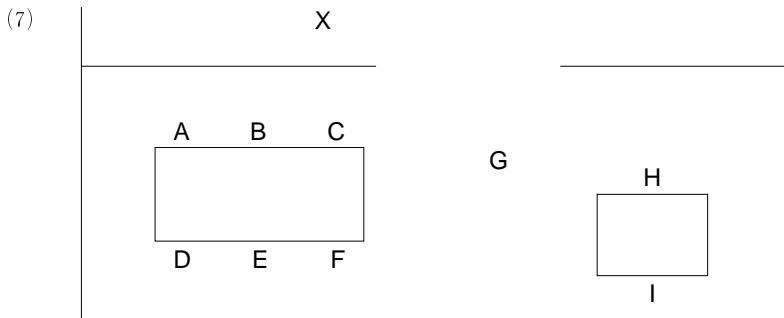
Betty : Why?

John : I know it's crazy. You're one of our top students. But they've decided you're not good enough, I guess.

このように、(4)において、Betty が発言した “I'm not good enough” が、究極的には、(5)において、Ann が発言したことばに由来していることがわかる。また、(6)では、John が、Ann の発言をそのまま、Betty に伝えているにすぎないのである。

2. 解読者のもつ多くの役割 (roles)

ここで、次のようなレストランの場面を考えてみよう。

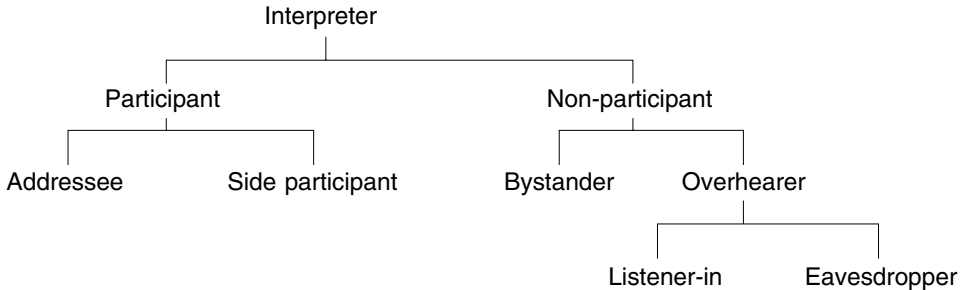


C と F とが、ある話題について、会話をとりかわしている。B と E は、となりの席で、それに耳をかたむけている。A と D は、べつな話題について話をしている。

ここで、それぞれを、解読者という観点からとらえてみることにする。C と F は、お互いの直接的な聞き手 (*addressee*) である。B と E は、副次的な参加者 (*side participant*) である。この場面において、他のすべては、非参加者 (*non-participant*) である。ここに、C と F の近くにいる、二人の会話に参加しようとする A と D は、傍観者 (*bystander*) であり、これには、またウェイターである G もあてはまる。さらに、C と F とが、まさに解読者としてとらえることのできないものに、H や I があり、偶然聞く者 (*overhearer*) である。ここで、H は視野の内にあるが、I はその外にある。ともに聞き耳をたてているところの盗聴者 (*listener-in*) である。偶然聞く者には、さらに、壁のむこう側で密かに、やりとりを耳にする、立ち聞きする者 (*eavesdropper*) X のようなものもある。

以上のような、解読者としての、さまざまな役割を図でしめせば、次のようになる。

(8)



解読者は、それが、どの範ちゅうに属するばあいであれ、発話者が、ことばを選択するうえで、きわめて大きな影響を与える。

たとえば、次のような例を考えてみよう。これは、同じ内容のやりとりを、一方では私的な会話で、他方ではテレビのインタビューのことば使いで示したものである。

(9) Crothers, to Senator

Smyth : Well, Joe, what do you think of the New Hampshire stink?

Smyth, to Crothers : It's a goddam mess. If Bill doesn't watch his ass, Bert may take away all his marbles.

(10) Crothers, to Smyth : Senator Smyth, what do you think of Jones's controversial remarks in the New Hampshire election campaign last week?

Smyth, to Crothers : They were unfortunate. If Senator Jones does not watch his step, Bert Appleman may get impatient with him and cut off all his campaign funds.

Crothers, to Smyth: You're speaking of Bert Appleman, the Democratic Party National Chirman, aren't you?

Smyth, to Crothers: Yes, I am.

(9)とくらべて、(10)におけることば使用の特徴は、次のようなことにある。i) Joe, Bill, Bert のような、ファーストネームによる、私的な名前の用い方や、the New Hampshire stink, all his marbles のような表現が、よりひろい人々に理解できるようなことば使用になっている。

ii) Crothers が、みずからはもちろん周知のことであっても、相手の Smyth に、Bert Appleman は、どういう人物であるか、あえて、ひろく人々に分るように、明らかにしている。iii) 文体が改まった、より形式的なものになっており、ののしりことば (*expletive*) が省かれている。

このように、発話者ないし話し手は、解読者ないし聞き手に応じて、ことばを用いる。発話は、いわば相手にふさわしい形で、設計され、進められるのである (*recipient or audience design*)³⁾。ここには、また、場面ないし領域 (*domain*) にしたがって、言語表現を選んで適切なコード(言語ないし変種)を用いる、言語切り替え (*code-switching*) の原則がみられる。⁴⁾ これは、ある個人または、言語集団が、2種類の方言を使いわけ、二方言使用 (*bidialectalism*) の例でもある。⁵⁾

3. 心的世界

ことばのやりとりは、心と心のやりとりである。ここで、発話のもつ、心的な側面について考えてみることにする。

次の例をみよう。

(11) Tom, I think you should seriously consider resigning.

これは、会社の役員会で、Mike が、友人である社長の Tom に述べたものであるとしよう。この発話には、どのような心的特性が認められるのであろう。

まず、人格 (*personality*) にかかわるものがある。Mike は、信頼性があり、あてにすることができなのか、それとも、計算だかく、抜けめない人間であるのか。感情 (*emotions*) にかかわるものがある。Mike は、事態を、ほんとうに心配しているのか。Tom に心から同情しているのか。信念 (*beliefs*) にかんして。Mike が提案しているのは、最良のやり方だと、心から信じているのか。辞職を求めるほど、Tom は重大なあやまりを犯したと思っているのか。願望ないし要請 (*desires or wishes*) にかんして。Mike の気持は、どのくらい強いのか。それは、なにか私的なものか、それとも純粹に、状況にもとづくものなのか。動機ないし意図 (*motivations or intentions*) にかんして。Tom を救うためか、それとも会社を救うためか。あるいは、個人的な利益ないし地位をうるためか。

(11)は、以上のような、心的情況ないし側面を認めることができるものなのである。したがっ

て、より明確な発話が求められるとするなら、たとえば、次のようなものになる。

(12) We don't want any more trouble. Tom, I think you ought to resign.

(13) Tom, as a friend, I really think you should consider resigning, in your own best interest.

(14) The company will suffer greatly if you don't resign while you can still do so gracefully.

(12)と(14)は、会社にかかわる、公的な理由づけによる限定をつけくわえたものである。(13)は、友人にかかわる、私的な理由づけによる限定をくわえたものである。

これらの発話は、直接的な参与者である、役員のMikeと、社長のTomのみならず、けっきょくは、役員会のすべてのメンバーにかかわるものである。さらには、会社組織全体にかかわる。このように、ひとつの発話は、そのうしろに、ひろくて大きい背景を、まるごとかかえているものなのである。

4. 社会的世界

発話者、解読者は、それぞれ一人称 (*first person*)、二人称 (*second person*) として、直示表現 (*deixis*)⁹⁾にかかわっている。第三者は、三人称 (*third person*) として、発話に登場する。ここには、また個人的な意見や気持ちにかかわる、態度的 (*attitudinal*) な直示表現がある。それは、親疎関係やウチとソトとの関係をあらわすものであり、T (= *tu*) と V (= *vous*) の区別や、⁷⁾ 敬称 (*title of address*)、ていねい表現 (*politeness*) 全体がかかわってくる。⁸⁾

一般に、社会的な仕組みや背景が、ことばの選択に関与している。たとえば、判決を言いわたすことができるのは、裁判官である。また、しゃべりたくないことは言わなくてよいとか、弁護士をよぶことができるといった、法律で保護されている権利を読んできさせるのは、逮捕された人に対してである。

ここでは、権威ないし権力と依存ないし従属の関係が成立しており、それにのっとなって、ことばの選択がおこなわれる。制度的に権力を付与されたものは、命令をくだしたり、許可を与えたりすることができる。それに対して、相手側は、たずねたり、求めたりすることになる。知識あるものは、忠告を与えることができ、そうでないものは、物を問うことになる。

さきの例を考えてみよう。Mikeが、(11~14)のような発話を述べることは、もしも彼が、新しい役員であるならば、それは不可能である。Mikeは、確固とした地位のある、影響力と権威のある、ひょっとして、次期社長候補であるかもしれない人物であることが予測される。

このような社会的な現象にみられる、ことばの選択には、制度的、情況的または共同体的に特有な、伝達上の規範がみられる。ところで、これまでみてきた(11~14)の型は、きわめて西洋的なものである。もしも文化 (*culture*) がことなれば、ことなった規範が考えられる。

たとえば、それは次のようなものである。

(15) This may be the time to pass the chair on to someone else.

これは、より間接的で、形式ばった表現をふくむものである。

文化というときには、たとえば、次のようなことがかかわってくる。話しことばと書きことばの社会、いなかと都会の生活の型、主流と下位の環境といった側面である。さらに、ここには、社会階級、民族、国民性、言語類型、宗教、年齢、教育の度合、職業、血縁関係、性差などが問題となってくる。⁹⁾

5. 物理的世界

ことばの選択には、物理的な世界が関与している。それには、主として、時間的な直示体系と空間的な直示体系がある。

時間的な直示体系。

ここでは、三つの時を区別することができる。それは、事象時(*event time*)、発話時(*time of utterance*)、指示時ないし基準時(*reference time*)である。¹⁰⁾

事象時とは、次の例における、in 1963 である。

(16) JFK visited Bellagio in 1963.

次の例における過去時、現在時、未来時表現において、発話時は、直示の中心(*deictic center*)として働いている。

(17) Yesterday I defended my PhD thesis.

(18) I'm planning a party now.

(19) I'll start looking for a job tomorrow.

指示時は、しばしば when, after, before などの時を表わす副詞節によって表現される。

(20) I found your coat after you had left the house.

これは、発話時とは異なるところに、直示の中心をおく表現である。

一般に、時の表現は、かなり不確定なもの(*indeterminacy*)をふくむ。たとえば、次のような表現をみてみよう。

(21) Just a sec.

(22) Today it is not easy to find a job.

(23) JFK visited Bellagio in 1963. He was not alone that day.

(21)において、a sec は、文字どおりのsecondではない。だれが発するのかが、またどのような状況であるのかによって、その長さにはちがいが生じる。(22)における today は、当日ばかりではなく、現在をふくむ、ひろい時を示す。(23)において、that day は、in 1963 と、同一指示の関係にはないが、1963 年のある日として解釈されうるものである。

空間的な直示体系。

空間的概念は、人間の思考の中心をなすものであり、それは、おおくの比喩 (metaphor) のもととなっている。¹¹⁾

(24) before the end of the year(時)、close friends(交際)、high voice(音)、high society (階級)、high amount(量)、ups and downs(気分、その他)、the rising tide of pluralism (傾向)、a narrow mind (心) etc.

空間的關係は、英語ではたとえば、次のようなものによって表わされる。

(25) 前置詞：in, on, under, behind, between, in front of

副詞：here, there

代名詞：this, that

動詞：come - go, bring - take

地名：London, Harrods

ここで、here, this は、話し手のなわばり (territory) にかかわるものであり、there, that は、聞き手のなわばりにかかわるものである。また、come は、談話の当事者 (= 話し手と聞き手) のなわばりの中にはいることを示す動詞であり、go は、話し手のなわばりの外へでることを示す表現である。なお、bring - take は、come - go に対応する使役形であり、それぞれ cause + come, cause + go ととらえることができるものである。

一般に、東西、南北といった表現は、絶対的空間關係 (absolute spatial relations) を示すものとみなされている。これはもちろん、一定の軸を中心に回転している、この惑星においてのみ成りたつ。

絶対的空間關係を示すものには、さらに、本質的、内在的な方向 (intrinsic orientations) をもつものがある。それは、動物の頭や尾、車の前部、後部である。また、家についても同じことがいえる。

しかしながら、空間的な指示關係は、また相対的なものである。これは、視点が、発話者の領域にあるか、それとも指示対象の領域にあるかによって生じる現象である。たとえば、左・右 (left・right) やここ・あそこ (here・there) といった空間をしめす概念が、それにあてはまる。このばあい、直示的中心となる視点が、固定されてはじめて、指示空間が決定されてくるものである。

ところで、次の例をみよう。

(26) The silk store is near the cathedral.

これは、the silk store を、the cathedral という指示対象の領域において、述べたものである。前者は、また空間的な關係において、いわば図 (figure) ないし前景 (foreground) をなし、後者は、図の空間的關係にとって、直示的中心をなすところの、地 (ground) ないし背景 (back-

ground) をなしている。

発話者は、しばしば、対象のもつ内在的方向と一致する視点で、表現する。

(27) *to the left of the car.*

これは、ふつう運転手や乗客の視点からみて左側である。しかしながら、それは、また車の前部にむかって左側を意味することがある。同じように *in front of the car* は、一般には、車のほんらいの前部をさしめすが、発話者と車のあいだの空間をも意味しうる。

発話者ないし話し手が、解読者ないし聞き手の視点で、ことばを表現するのは、電話でのやりとりのばあいのように、相手の理解を容易にするがためである。これは、またひろく起点 (*S: from*) からの視点によるか、それとも着点 (*G: to*) からの視点によるかの表現のちがいでもある。一般に、発話者は、相手に受けいられるために、自分の話し方のスタイルを相手のスタイルに近づけようとする。ここには、発話順応ないし適応 (*speech accommodation*) の原則を見いだすことができる。¹²⁾

注

- 1) 用例は、主として Verschueren (1999) による。
- 2) Bakhtin (1981) など。
- 3) Bell (1984) (1991) など参照。
- 4) ことばの使い方にもとづく変種である、使用域 (*register*) にかかわる。つまり、ことばがどのような目的、場面、手段、態度、役割などで用いられるかの側面である。さらに、Blom and Gumperz (1971)。
- 5) 二重言語生活 (*diglossia*) ともいわれる。方言は、ことばの使用者にもとづく変種であり、それには地域的なものと、社会的なものがある。
- 6) 荒木、安井 (編)(1992)、安井 (編)(1996) を参照。さらに Sperber and Wilson (1986)。
- 7) それぞれ仲間意識 (*solidarity*) と権威ないし上下関係 (*power*) を示す。Brown and Gilman (1960) 参照。
- 8) たとえば小川 (1987) (1988) など参照。
- 9) 社会言語学 (*sociolinguistics*) 一般の問題となる。これにかんしては、さらに Hudson (1980) Wardhaugh(1992³)、東 (1998) など。
- 10) 時制 (*tense*) がかわってくる。一般に、発話時を現在とし、それより以前の時点は過去、それより後の時点は未来である。さらに荒木、安井 (編)(1992) など参照。
- 11) 認知言語学 (*cognitive linguistics*) では、人間の概念体系は、基本的に比喩的であるとする。たとえば Lakoff and Johnson(1980)、Lakoff(1987)、Langacker(1987、91)、Taylor(1989) など。
- 12) Giles, N. Coupland and J. Coupland (1991) 参照。

文献

- 荒木、安井 (編) 1992. 『現代英文法辞典』東京：三省堂。
- 東 照二. 1997. 『社会言語学入門』東京：研究社。
- Bakhtin, M. M. 1981. *The dialogic imagination*. Austin: University of Texas Press.
- Bell, A. 1984. Language style as audience design. *Language in Society*. 13 : 145 - 204.
- 1991. Audience accommodation in the mass media. In H. Giles, T. Coupland and N. Coupland (eds.) *Contexts of accommodation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blom, J. and J. Gumperz. 1971. Social meaning in linguistic structure: code - switching in Norway. In Gumperz. *Language in social groups*. Stanford: Stanford University Press.
- In J. Gumperz and D. Hymes(eds.). 1972. *Directions in sociolinguistics*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- Brown, R. and A. Gilman. 1960. The pronouns of power and solidarity. In T. A. Sebeok (ed.) *Style in language*. Cambridge, Mass.: MIT Press. In J. Fishman(ed.). 1968. *Readings in the sociology of language*. The Hague: Mouton.
- Giles, H., N. Coupland and J. Coupland. 1991. Accommodation theory: communication, context and consequence. In H. Giles, T. Coupland and N. Coupland (eds.) *Contexts of accommodation*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Hudson, R. A. 1980. *Sociolinguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
(松山、生田訳. 1988. 『社会言語学』東京 : 未来社)
- Lakoff, G. 1987. *Women, fire, and dangerous things : what categories reveal about the mind*.
Chicago : University of Chicago Press.
(池上 他訳. 1993. 『認知意味論——言語から見た人間の心』東京 : 紀伊国屋)
- Lakoff, G and M. Johnson. 1980. *Metaphor we live by*. Chicago : University of Chicago Press.
(渡部 他訳. 1986. 『レトリックと人生』東京 : 大修館)
- Langacker, R. W. 1987. *Foundations of cognitive grammar. I*. Stanford : Stanford University Press.
———1991. *Foundations of cognitive grammar. II*. Stanford : Stanford University Press.
- 小川洋通. 1987. 「対人関係レトリック」『富山大学人文学部紀要』12 : 79 - 96.
———1988. 「ていねいさの諸相」『富山大学人文学部紀要』13 : 89 - 108.
- Sperber, D and D. Wilson. 1986. *Relevance : communication and cognition*. Oxford : Basil Blackwell. (内田 他訳. 1993. 『関連性理論——伝達と認知』東京 : 研究社)
- Taylor, J. R. 1989. *Linguistic categorization : prototypes in linguistic theory*. Oxford : Clarendon Press. (辻 訳. 1996. 『認知言語学のための14章』東京 : 紀伊国屋)
- Verschueren, J. 1999. *Understanding pragmatics*. London : Arnord.
- Wardhaugh, R. 1992². *An introduction to sociolinguistics*. Oxford : Basil Blackwell.
(田部、本名監訳. 1994. 『社会言語学入門』(上・下)東京 : リーベル出版)
- 安井 (編) 1996. 『コンサイス英文法辞典』東京 : 三省堂.